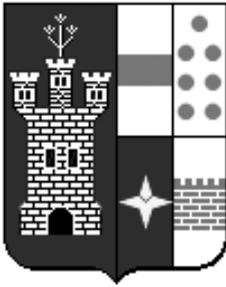


## 百年・二百年・三百年

同志社大学大学院司法研究科教授 深谷 格

ナポレオン没後二百年を横目に、私は目下ナポレオン法典(フランス民法典)の起草者ポルタリス(1746-1807)の評伝を翻訳中である。石井三記教授が本誌520号でモンテスキューのペスト防疫論を紹介されたが、モンテスキュー存命中の1720～1721年のマルセイユのペスト大流行はポルタリスにも関係がある。ポルタリスの大伯父ジャック・ポルタリスは、トゥーロン執政官として1720年のペストの際に活躍し同年に任期を終えたが、翌年、後任執政官ガヴォティと代わり執政官に再び就任する。ガヴォティがペストで病死したからである。ジャックとその息子らもペストに感染するが、ジャックとその家族らは奇跡的に生き残り、住民の救援に尽力する。そのため、ジャックは1725年に貴族の授爵状を受け、ポルタリス家は判じ絵紋章(左掲の紋章の左側部分)を与えられた。これは「青地に石造りの銀色の塔。門は別色の黒。塔には三門の大砲の銃眼が開き、その真上に三輪の銀色の百合がある」「百合への門[porte à lys]と呼ばれる紋章である。ここにポルタリス[Portalis]の家名が隠されており、銘は「我は、我を愛する者に仕へん」である。三はキリスト教の完全数、百合はブルボン王家、塔は聖母マリアの象徴である。フランス民法典の呼称が体制の変化に伴いCode civilとCode Napoléonの間で変転するように、この紋章の百合も、体制の変化に伴い出現と消滅を繰り返す。ポルタリスは王党派で敬虔なカトリック信徒、



宗教大臣としてナポレオンと教皇の調停者となった。長命なら歴史を変えたのだろうか。

1720年のペスト大流行は、中近東からマルセイユに入港した船が持ち込んだペスト菌が発端である。モンテスキューによれば、中近東では感染者の衣服も売買の対象とされていたから、輸入品にはこの種の衣類も含まれており、乗組員にも感染者がいた。マルセイユでペストが流行したのは貿易港の宿命である。瀬戸内海を地中海に見立てると、マルセイユに相当するのはその姉妹都市・神戸だ。今から約百年前、流行性感冒(スペイン風邪)のパンデミックは神戸をも襲った。神戸市役所編『神戸市史第二輯本編』(1937年)は、1918年から1920年2月まで大流行したと記す。3年間で、全国では患者2380万人、死者9万人に上ったが、神戸市だけで1919年には患者1万8千人、死者1450人(死亡率8.1%)、1920年には患者5万人、死者3450人(死亡率6.9%)に上った。但し、前掲『神戸市史』はより死亡率の高い法定伝染病を詳述し、流行性脳脊髄膜炎は1919年に患者433人、死者224人(死亡率51.7%)、天然痘は1919年に患者1264人、死者432人(死亡率34.2%)、コレラは1919年に患者52人、死者32人(死亡率61.5%)、1920年に患者609人、死亡率57.5%に上ったと記す。特に、コレラは外国から持ち込まれたと強調する。

国際書房は、1920年10月10日(後の東京五輪開催記念日)、スペイン風邪とコレラの流行の最中に神戸で創業した。社名は同年発足の国際連盟に因んだものかもしれない。創業者・服部春一は、第一次世界大戦後のインフレで洋書を安価で入手できることや、ドイツが巨額の賠償金を支払うため外貨獲得に熱心なことに着目して、洋書輸入業を始めたようである(脇村義太郎『東西書肆街考』(岩波書店、1979年)170-172頁、服部正喬『洋書輸入50年思い出ばなし』(1970年))。コロナ感染状況悪化による調達遅延の連絡を受け、往時の洋書輸入の労苦に思いをはせた。

ジャン・エティエンヌ・マリー・ポルタリスの紋章(ジャックの紋章は左側部分)

出典：<https://www.napoleon-empire.net/personnages/portalis.php>